

なにわ たいむず

No.102



contents

- 01 News / アトリエナニワ
- 02 Case Book
- 04 ジムインこいけのなんでも日記
サポータークラブ
- 05 スタッフ紹介 (特別編)

新しい仲間をご紹介します！！

この4月からなにわの里に加わった新しい仲間をご紹介します！

(写真向かって右)

氏名：辻本 みなの

所属：入所グループホーム支援1係

(写真向かって左)

氏名：高松 芹香

所属：入所グループホーム支援1係

なかなかご家族の皆さまと顔を合わせることができないですが、これからどうぞよろしくお願い致します。

(小池)



NEWS

きつずサポートなにわ、地域相談・連携室

移転しました！！

4月1日、きつずサポートなにわとなにわの里 地域相談・連携室が移転しました。新住所は、

〒582-0025 大阪府柏原市国分西1-3-43 HOPEハウス101102 となります(法人本部事務局のある建物の1階です。電話番号・fax番号は変わりありません)。どうぞよろしくお願い致します。

(小池)



アトリエナニワ

なにわの里で使用している自立課題や支援ツールを紹介するコーナー

【ツールの説明】

- ・日々の出来事を振り返る時に活用
- ・『いつ・どこで・誰と・何をした・気持ち・気持ちのレベル』の項目に沿って振り返る。

【ツールのメリット】

- ・ヒントとなる項目があることで、想起しやすくなる。
- ・自身の行動や気持ちを視覚的に振り返ることができる。

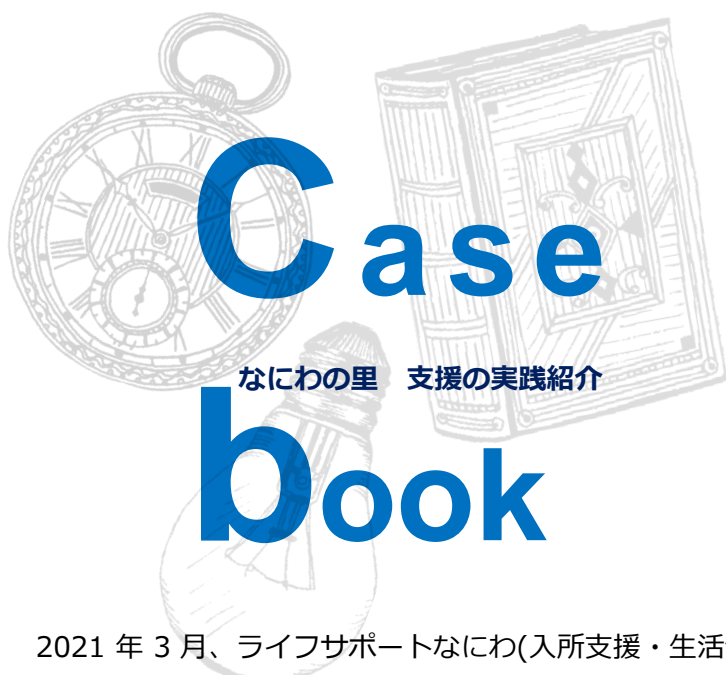
『振り返りシート』

何をして、どんな気持ちでしたか？

月日()	月日()	月日()	月日()	月日()	月日()	月日()
CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?
CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?
CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?
CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?	CCCT?
10						
9						
8						
7						
6						
5						
4						
3						
2						
1						
0						

(きつずサポートなにわ 梅林)

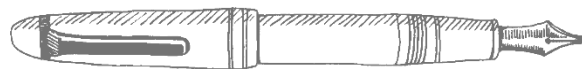
atelier naniwa



Case

なにわの里 支援の実践紹介

book



新型コロナウイルス感染

管理者 漆嶋 真一



2021年3月、ライフサポートなにわ(入所支援・生活介護事業)で、新型コロナウイルスのクラスターが発生しました。収束までの間、関係者のみなさまには大変ご心配をおかけしました。また、さまざまな方から励ましのお言葉やたくさんのご支援をいただきました。今回のなにわたいむずでは、収束までの経緯や現場での対応を報告することで、少しでも皆様のお役に立てればと思います。

【収束までの経緯】

感染から収束までの経緯は表1の通りです。結果、感染者は利用者さん6名、スタッフ3名(一人目のアルバイトスタッフは除く)の合計9名、一人目の陽性利用者が判明してから27日目で収束となりました。感染が判明した利用者さんは全員入院でき、スタッフも合わせて軽症及び無症状であったことは、不幸中の幸いでした。

【事前の感染対策】

以前より法人として感染対策には力を入れてきました。その理由として、①知的障害があり、激しい行動がある方が暮らす施設でコロナの感染が広まった場合、施設及び法人全体に感染が広がるのを防ぐことが難しい ②感染しても入院できないかも知れない ③スタッフが濃厚接触者となり、勤務できないかも知れない と考えていたからです。

帰宅の中止やマニュアルの作成などは進めていましたが、一番力を入れたのは、エリアを入所1F・入所2F・グループホームに三分割し、日中場面も含め、エリア間の利用者さんの交わりをなくしたことです。こうすることで、感染が発生しても被害を最小限に抑えることができると考えました。実行には多くの労力を要しましたが、今回の感染が全体に広がらずに一つのエリア内で収まったことを考えると、成果は絶大であったと思います。

【陽性利用者判明後の対応】

陽性と確定した利用者さんは別棟で隔離してレッドゾーンとし、その対応を日中は管理者が、夜間は理事長が装

3/11(木)	アルバイトスタッフが陽性
13(土)	利用者Aさんが発熱、陽性
15(月)	2Fフロアで唾液によるPCR検査を実施
16(火)	利用者Bさんが発熱、陽性
17(水)	15日の結果、利用者Cさん・Dさんとスタッフ1名が陽性 鼻からのPCR検査を実施
18(木)	17日の結果、利用者Eさんが陽性
19(金)	利用者Fさんが発熱、陽性
22(月)	2Fフロアで唾液によるPCR検査を実施
24(水)	22日の結果、スタッフ2名が陽性
25(木)	1Fフロアで唾液によるPCR検査を実施
28(日)	25日の結果、全員陰性
4/2(金)	入所全体で唾液によるPCR検査実施
4(日)	2日の結果、全員陰性
7(水)	入所全体で唾液によるPCR検査実施
8(木)	7日の結果、全員陰性、収束

表1 収束までの経緯



写真① 感染が出たエリア内の様子



写真② 防護服等備品の在庫状況

備(タイベック、N95 マスクなど)をして行いました。感染エリアの対応を現場配置のスタッフが行うことで現場の負担が増えることや、持病を持っていたり、家族に小さい子どもや高齢者がいるスタッフに感染の危険がある業務を担ってもらうことに配慮してのことでした。

ただ、感染者が増えるにつれて、現場のスタッフの不安も高まっていったため、感染者がいたエリアもレッドゾーンと同じ扱いにし、防護服等を装備しました。家族への感染を心配するスタッフにはホテルの宿泊代等を全額補助しました。

感染が出たエリアでは、歯磨き・髭剃り・入浴を中止しました。また施設全体としても食堂の使用を中止し、使い捨ての弁当箱に詰めて、それぞれのエリアで食事しました。

さらには、生活介護事業の地域からの通所利用や児童の通所利用を見合わせ、それらのスタッフをグループホームに配置しました。また、事務スタッフが消耗品の管理やごみ回収、家族との連絡などの役割を担いました。

【利用者さんの様子】

感染者がいたエリアの利用者さんは、食事が弁当になり、歯磨きや入浴がなくなり、一日中館内で過ごすことになりましたが、大きく調子を崩す方はいませんでした。

【対応に困ったこと】

対応に困ったのは、防護服を脱ぐ際の指導・チェックが十分できなかった点です。防護服は脱ぐ際に細心の注意が必要になりますが、現場スタッフは防護服に不慣れであるため、安全に脱ぐにはその場で指導が必要です。保健所には早期に感染の専門家の派遣を要請しましたが、すぐに確保は難しいという回答でした。感染を広げないといった視点から、ぜひとも専門家の派遣はお願いしたいところです。

また、PCR 検査は唾液採取の方法が中心で、鼻腔内をぬぐう方法は本人に負担がかかるとしてほぼ実施しませんでした(感染がでたエリアの利用者さんに対し、一度だけ実施)。早期に全員が検査することで、陽性者を素早く隔離することができ、感染拡大を防ぐことができます。速やかな検査の実施を訴える必要を感じました。

【まとめ】

今回、合計 9 名の感染者を出しましたが、知的障害者の入所施設としては被害を最小限に食い止めることができたと思っています。この間、ご心配をおかけしたご家族、法人を心配して寄付や消毒等の手伝いをしてくださった関係者の方々、不安の中利用者支援に従事してくれた法人スタッフに対し、改めてお礼を申し上げます。何より、環境が大きく変わり、不自由な生活を強いられたにも関わらず、じっと耐えて協力してくれた利用者の皆さんにも心から感謝いたします。

施設内で感染者が出たことは致し方ないにしても、感染を広げてしまったことは決して褒められることではありません。それでも、みんなで一致団結し、この危機を乗り切れたことは、管理者として誇らしく思います。これで終わりではなく、世間は感染の脅威が止みません。一人ひとりの命を守るため、より一層の感染対策を進めていきたいと思えます。

理論と実践を歩き来しながら

4月から、母校である関西福祉科学大学の大学院に「聴講生」として週1回通っています。「障害者福祉特論」という授業で、学部時代の恩師の講義を若い学生さんたちに交じりながら(笑)、楽しく勉強をさせて頂いています。

昨年あたりから、オンラインの研修などで、外部の方々のお話を伺う機会を積極的に持つようになっています。これまで15年今の職場で働いてきたのですが、ただただ地道に働くだけではいつかエネルギーが尽きてしまうのではないかと、という不安があったのだと思います。

これまでも自閉症の方の支援スキルや、労務関係のことなどいわゆる「方法論」「各論」については研修等で学んできたつもりでしたが、そうではなく「考え方」「自分の哲学」について外からの刺激を受けて変容させていくことが必要なのではないかと考えるようになりました。

そう思うようになったきっかけはなんだったのだろう、と思い返してみると2016年7月の相模原の事件に行きつくのです。「言葉の話せない重度知的障害のある方々、激しい行動障害のある方々が生きていく意味は何だ」ということが私たち支援者に問い掛けられた出来事だった、と私は捉えています。もうひとつ踏み込めば「自分が生きている意味は何だろう」ということにも繋がると思っています。その問いに対してどのような答えが持てるのか、自分の中で考えてはみるのですが、どこか凝り固まった考えばかりが浮かんでくる、という感じでした。

「行き来」が足りなかった、と感じました。理論(学ぶ場所)と実践(現場)とを歩き来しながら、考えをめぐらすということを経ず、現場の中で鬱々と考えるようなことをしていました。凝り固まった頭でこの問いに立ち向かうのではなく、理論と実践を歩き来することで頭を柔軟にさせて、エネルギーを蓄えながらゆっくりと進んでいくことが大切なのではないかと考えています。

なにわの里サポータークラブに資金又は物品・労力などご支援をいただいた方々(敬称略・順不同)

2021年1月1日～3月31日

〔法人・団体の部〕

株式会社マルワ イワタニ近畿株式会社 阪奈営業所 社会福祉法人椿福社会
社会福祉法人産経新聞厚生文化事業団 第2三恵園
社会福祉法人四条囃福社会 なわて更生園

〔個人の部〕

光田 一二三 小畑 貴央 小畑 チヅ子 井上 政二 舟橋 一枝
合田 裕章 山下 孝子 井上 明子 小島 純子

STAFF INTERVIEW

今回は特別編、ライフサポートなにわで新型コロナウイルスの感染が広がってしまった際に、現場で実際に支援にあたったスタッフにインタビューした内容を物語形式にしてお送りいたします。

登場人物：東條 元（入所支援2係 係長）

本部長と自分の二人で、最初の感染者となる利用者 A さんの通院に行く。「陽性でした」という医師の言葉を聞いても「うそやろ?」という感じでリアリティがなかった。帰りの車の中ではそのまま A さんの対応にあたる気持ちでいたのだが、施設につくと怖さが出てくる。妻には電話で「自分だけではなくてみんなも感染者対応にあたるから」と話して了解を得た。

軽症で終わる人が多いとは聞いているけれど、軽症がどんなものなのかもわからない。「わからない」というのは怖いものだ。職場に向かう車の中では、怖さを打ち消すために大音量で音楽を聴いた。

実際にレッドゾーンで A さんの対応をした中で感じたのは、「ずっと見ていないといけない」ということの大変さだった。防護服を着て、N95 マスクをつけて、ビニール手袋を二重ではめて、フェイスガードをした状態で、ずっと A さんを見ているというのは本当に大変だった。

入所施設 2 階で感染が広がり始め、2 階の係長として支援現場に戻るようになった。感染者だけのレッドゾーンとはまた違う難しさ、「どこが安全でどこが危険なのか」ここでもわからないことの怖さがあった。

対応の流れがつかめてくると当初のバタバタ感はなくなってきた。防護服の後ろに「ICHIRO 55」なんて書いて、みんなを笑わせるスタッフもいた（イチロー選手、本当は51番）。

およそ1カ月、新型コロナウイルスの感染が広がった現場に立っていた。大変だったが、「疲れ切ってもう立てない」という感じではなかった。疲れがある中でも「自分がリーダーとして現場に立っていることに意味があるんだ。何もなくても現場に行こう」という気持ちだった。

そういう気持ちを支えてくれたのは、何よりスタッフのみんなだった。それぞれに思うところはあるながらも、現場に立ち続けてくれたみんなの存在があったから自分も頑張れたのだと思う。4月7日、完全終息の連絡が保健所から入った日、夜勤明けだった。その知らせを聞いて、すぐに家から2階のみんなのところへ向かった。

第102号

2021年5月21日発行

発行責任者 前田研介

社会福祉法人 なにわの里

〒582-0025 柏原市国分西 1-3-43HOPE ハウス 202

E-mail naniwa@naniwanosato.jp

HP <http://naniwanosato.jp>



Facebookでチェック 

右のQRコードから
かんたんアクセス!

